

「今なら出来ること」

京都第一赤十字看護専門学校 一年生

太田 歩 女性

今から十五年前のある日、わたしは祖父の病室にいた。その時は祖母が寝たきりの祖父にヨーグルトを食べさせており、わたしは椅子に腰掛けその様子をぼんやりと眺めていた。しばらくすると祖母が知人と会話をするため少しの間祖母から目を離した。するとその直後、祖父の口元からヨーグルトが垂れてきて、それは顎にまで流れようとしていた。わたしはその様子にすぐに気が付きハッとした。そして次の瞬間祖父と目が合った。祖父はその目で助けを訴えており、それはまだ小学生だったわたしでも確かに感じる事が出来た。わたしは瞬時に祖父を助けなければと思った。しかし、その時わたしの体はすっかり固まってしまい、動くことが出来なかった。すると祖母が気づき、気付かずにて申し訳なかったと言いながらヨーグルトをきれいに拭き取った。

わたしはその時の心境を今でも良く覚えている。当時わたしは祖父の家から遠く離れた所に住んでいたため、その時祖父に会ったのも随分久しぶりだった。そして久々に会った大好きな祖父は病人となっており、以前一緒に遊んでくれた元気な祖父の面影はどこかへ行ってしまっていた。そのことがわたしにはショックであり、大変悲しく感じられた。そして口から流れたヨーグルトを自分で拭き取ることさえ出来ずにいる祖父の姿を見て、助けなくてはと感じる一方で、あの祖父が自分で出来ないはずがない、そこまで弱ってしまっているわけがない、という切なる思いもあった。その二つの感情が葛藤している間に祖母が気づき対処したので、結局わたしはその状況に一番に気付いていたにも関わらず、助けを求めている祖父に対して何もしてあげることが出来なかった。わたしはそのことを後悔したが、その埋め合わせも出来ないまま祖父は他界した。

看護学校に入学してもうすぐ一年が経とうとしている。入学してからというもの、講義や演習、実習などを通して、本当に多くのことを学んでいる。看護に必要な知識や援助方法の習得だけでなく、看護者としての態度や患者さんへの理解なども身に付けられるようになってきた。実習では当時の祖父と同じ年代の患者さんを受け持たせて頂くこともあり、そんな時には、あの時何もしてあげられなかった祖父に対し、今なら病人としての祖父の気持ちをもっと理解出来るだろうし、色んな援助もしてあげられるに感じる。

戻れることなら十五年前に戻り、すぐに口元を拭いてあげたいし、残り少ない時間の中で少しでも長く傍で寄り添って支えてあげたいと思う。しかしそれは願っても叶わぬことである。祖父にしてあげられなかった分、他の家族やこれから関わらせて頂く患者さん達に対しては、あの時ああしておけば良かったという後悔をすることのないよう、その時自分に出来る精一杯の援助を行い、常に真摯に向き合っていきたい。